

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	AYA 世代のがん患者への理解と共生を深めるための がん教育 —プログラム作成とその効果について—
キーワード	①AYA 世代、②がん教育、③大学生を対象

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ナカムラ チズ 中村 千珠
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	大阪人間科学大学心理学部・助教
現在の所属先・職位等	大阪人間科学大学心理学部・助教
プロフィール	公認心理師、臨床心理士、博士（心理学）。大阪大学医学部保健学科卒業、奈良女子大学文学部卒業、京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科博士後期課程修了。 これまでに精神科やサイコオンコロジー領域で公認心理師として、臨床実践を経験し、現在は、大阪人間科学大学心理学部にて、公認心理師養成に尽力をしております。特に、ひとは困難な状況に直面しながらも、どのようにして乗り越え、人生を再び創造していくか、に関心があります。その中でも、がん患者が抱える喪失感や孤独感、絶望感といった心のいたみにどのように向き合い、寄り添っていくかということについて、臨床を通じて研究をしております。

1. 研究の概要

思春期・若年期成人のがん患者（Adolescent and Young Adult：以下 AYA 世代）に対する支援を考えていく上では、当事者だけではなく、彼らを支える周囲の人々へのアプローチも大切だと考え、大学生を対象に、AYA 世代のがん患者が抱える心理社会的問題への理解と共生を深めるためのがん教育プログラムを作成し、その効果を検討することを目的とした。さらには、これら教育を通じて、大学生自身が健康と命の大切さに対する認識を深め、自分自身がいかにか生きるべきかを考えられるようになることをも目指した。

そこで、「AYA 世代のがん」に特化した教育として、1)心理教育（AYA 世代のがん患者が抱える特有の問題）、2)AYA 世代のがん患者の経験談、3)グループディスカッション、の3側面からなる講義内において1回程度で完結できるプログラムを考案した。本研究では、大学生55名（平均年齢=19.3, SD=.50）を対象に、そのプログラムを実施し、プログラムに参加する前と参加した後で、①AYA 世代のがんに関する知識、②がん患者への関わり方への態度、③がん教育に伴う自己の成長、の観点からがん教育の効果を検討した。その結果、プログラム参加後に、AYA 世代のがんに関する知識が有意に向上した。さらに、「AYA 世代のがん経験者の相談にのりたい」「自分自身に手伝えることを教えてほしい」といった項目で、介入後に有意に得点が高まり、AYA 世代のがん経験者への関わり方への態度において、積極的な姿勢がみられることがわかった。また、大学生自身が本プログラムを通じて、「自分の人生について見直している」「一生懸命生きていきたい」等の項目で介入後に有意に得点が高まり、自分自身の生をみつめるきっかけになりうる可能性も示唆された。

2. 研究の動機、目的

AYA 世代については、がんの罹患が最も低い世代であるがため、2017 年「第 3 期がん対策推進基本計画」で初めて AYA 世代へのがん対策が明記されるなど、心理社会的支援の在り方が重要視されはじめてきている。とりわけ、AYA 世代のがん患者が抱える特有の問題、すなわち、就学、就職、恋愛など様々なライフイベントに直面することで生じる問題やがんの罹患が最も低い世代ということもあり、周囲に同世代の経験者が少なく、孤独感を抱きやすいという側面への支援が求められる。そこで、AYA 世代のがん患者に対する支援を考えていく上では、当事者だけではなく、彼らを支える周囲の人々へのアプローチも大切だと考える。特に、患者の支えとなり得る、AYA 世代と同年代である大学生が、AYA 世代のがん患者が抱える心理社会的問題への理解を深めることは重要であろう。

本研究では、大学生を対象に、AYA 世代に特化したがん患者が抱える心理社会的問題への理解と共生を深めるためのがん教育プログラムを作成し、その効果を検討することを目的とする。さらには、これら教育を通じて、大学生自身が健康と命の大切さに対する認識を深め、自分自身がいかに生きるべきかを考えられるようになることも目指す。

3. 研究の結果

●プログラム作成に向けて

プログラム作成に際し、筆者ら(瀧川・中村, 2022)は、大学生に必要ながん教育の在り方を探るために、大学生 203 名を対象に、大学生が AYA 世代のがんに対しどのようなイメージを抱いているのかという現状を把握するための質問紙調査を行った。その結果、大学生が抱く AYA 世代のがんに対してのイメージは「がん経験による気づき・成長」「がんに伴う人生・将来設計への不安」「絶望感」の 3 側面が見出され、「がんに伴う人生・将来設計への不安」へのイメージが高く、「がん経験による気づき・成長」へのイメージが低いことがわかった。これら結果を踏まえ、「AYA 世代のがん」について理解を深めるためには、ネガティブな側面だけではなく、特に家族や周囲の人との関係性についてはポジティブな影響も得られることも含め、大学生はその支えになり得る可能性もあることをも盛り込んだ独自のプログラムを 2023 年度に考案した。

「AYA 世代のがん」に特化した教育として、1)心理教育 (AYA 世代のがん患者が抱える特有の問題について)、2)AYA 世代のがん患者の経験談を視聴、3)グループディスカッション、の 3 側面からなる講義内において 1 回 (90 分) で完結できるプログラムを考案した。

●プログラムの効果について

本研究は、大学生 55 名 (男性 29 名、女性 24 名、回答しない 2 名、平均年齢=19.3, $SD = .50$) を対象に、AYA 世代に特化したがん患者が抱える心理社会的問題への理解と共生を深めるためのがん教育を実施した。そして、その効果を検討するためにプログラム参加前、プログラム参加後の計 2 回にわたり、質問紙調査を行った。プログラムの効果は、①AYA 世代のがんに関する知識、②がん患者への関わり方への態度、③がん教育に伴う自己の成長、の観点から検討をした。その結果、①**AYA 世代のがんに関する知識**では、介入後に AYA 世代のがんに関する知識が有意に向上することがわかった。②**がん患者への関わり方への態度**では、例えば、「AYA 世代のがん経験者の相談にのりたい」、「自分自身に手伝えることを教えてほしい」、といった項目で、プログラム参加後は、プログラム参加前に比べ有意に得点が高まった。③**がん教育に伴う自己の成長**では、例えば、「自分の人生について見直している」「一生懸命生きていきたい」といった項目で、プログラム参加後は、プログラム参加前に比べ有意に得点が高まった。以上より、本プログラムに参加することで、AYA 世代のがんに関する知識が身につく、AYA 世代へのがん経験者への関わり方への態度においても、積極的に関わる姿勢がみられることがわかった。さらに、大学生自身が本プログラムを通じて、自分自身の生を見つめなおすきっかけになりうる可能性も示唆された。今後は、見られた効果が定着するかどうかを検討していく必要があると考える。

4. 研究者としてのこれからの展望

苦悩を抱えている目の前の人に資するだけでなく、実践を伴う研究によっても多くの人々に貢献できることは、研究を続けていく上での原動力になっております。そのために、心理臨床と研究がつながるような視点を大事に、実際の現場に役立つ研究を目指しています。また、研究に協力をしてくださった一人一人の思いを大切に、その思いにこたえるべく、真摯に取り組んでいきたいと思っております。特に、患者の方々が抱える喪失感や絶望感といった実存的苦痛の緩和を目指すべく、今後も研究を発展させ、そして、これらの研究を通じて、自分自身も成長していきたいと思っております。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は女性研究者奨励金を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。採用されたときは大変嬉しく、ご支援を賜りましたことは、思い描いていた研究を遂行するにあたり私自身の心の支えともなりました。AYA世代のがん患者への理解と支援が広がることを願っており、本研究がその一助になればと思っております。さらに、AYA世代のがん患者への理解を通じ、大学生自身が自らの生を見つめ直し、生を大切に思うきっかけになればと思っております。今後も本研究で得られた知見を、学会や学術雑誌等で成果を発表し、少しでも社会に貢献できるように尽力してまいります。本当にありがとうございました。